

【人物から学ぶ歴史】

西郷従道伝 後編

<世にも不思議な人物>

明治32年、出版社の博文館は創業20周年の記念事業として「明治12傑」の投票を募集した。政治家・軍人・経済等12項目の第一人者を決めようという試みである。政治家では伊藤、軍人では西郷が選ばれている（他十傑は文学の加藤弘之、美術の橋本雅邦、法律の鳩山和夫、教育の福沢諭吉、科学の伊藤圭介、医術の佐藤進、宗教の釈雲照律師、農業の伊達邦重、工業の古川市兵衛、商業の渋沢栄一が選ばれている）。



この時の西郷についての評は「想うに古来史家の疑問となりたる人物少なきにあらずと言えども、いまだ西郷侯の如き不思議の人物見ること能わず。およそ智あるものは智を顕わし、勇ある者は勇を顕わし、野心ある者は功名を争う。世の英雄豪傑と称するものは皆これなり。西郷侯はこの例を以って推すべからざるものなり。侯は無辺無涯（限りのないこと）にして何らの表現なく、何等の作為なく、その愚はほとんど及ぶべからざる如き間に、凡夫の忖度（そんたく、推し量ること）し難き神秘に包まれたり。侯もまた、なお龍の如きか？」……味わい深い代表的な西郷評である。

また「抹殺博士」として有名な東大教授重野安繹（やすつぐ、実証的方法を用いて、児島高德の史話や楠木正成の桜井駅の別れの史話は事実でないとするなど、日本史の研究に新境地を開いた）は、もし自分が百年後に生まれるなら西郷の如き不思議な人物は実際にはいなかったと、または伝奇作者の仮想的人物であろうと、言うだろう。……との評言であった。彼はかくの如き無欲無私の人物はこの世に存在し得ないと思ったのであろう。

<明治海軍最大の貢献者>

明治18年、内閣制度発足と共に陸軍中將であった西郷は海軍大臣になった。世界でも全く異例の措置である。日本海軍の一大発展の為の海軍部内に人を得られず、外部の西郷が求められたのである。海軍については何も知らなかったが、役職の好き嫌いを問わない西郷はこの役についた。西郷はその後十年に渡って海相を歴任、日清・日露の二大海戦に勝利し得る日本海軍の建設と発展に全力を傾注したのである。

一大佐にすぎぬ山本権兵衛を抜擢、その手腕を存分にふるわせたのも西郷ならではの慧眼あつてのことであつた。西郷は自ら進んで事を行うよりは、優れた人物を見抜き、その人物を信頼し、十分に働かせることを得意とした。人を使い集団を統御することにかけては明治政府中、西郷に匹敵するものは居なかった。

西郷にしろ、大山にしろ、薩摩にはこのような型の人物が少なくなかった。だが西郷は部下に任せはしたが決していい加減な放任主義者ではない。何事も知らない様な顔をしながら要所は必ずおさえていた。ある時西郷は横着を決め込んだ山本を大臣室に呼び、山本の横っ面に平手を数発くらわし、その不心得を論じた。以降山本は十分に慎んだという。

日清・日露の両戦争に勝利し得た海軍の最大の功労者は西郷であつたと言っても歴史学者は反対しないであろう。当時の関係者の評価は次の如くである。

「実に帝国の海軍は日清・日露の二大戦役に遭遇して、よく護国の大任を尽くし、その勢威を世界の涯まで発揮したのであるが、その創業の功績は川村純義（すみよし）、仁礼景範（にれかげのり）等の諸將に譲らねばならぬが、その軍政を整理し、海軍発展の基礎を確立し、将来の海軍に対し反発力を与えて帝国海軍をして今日の盛大を為さしめたる偉功に至りては、これを西郷侯に帰せねばならぬ。あゝ明治の帝国海軍にして、もし西郷侯がなかったならば、誰が出でて海陸軍の均衡を維持し、また海軍部内における新旧思想の懸隔を調和して、これを統御し

えたであろうか。かく観じ来れば、侯は真に国家の柱石であり、また海軍の発展に貢献したる唯一無二の偉勳者であるといわなければならない」……と。これは誉め過ぎではない。実に西郷あって明治の日本海軍がありえたのである。

普通明治海軍の功労者は山本権兵衛を思い浮かべる。日露戦争時、西郷はすでに亡く、山本が海相だったから無理もないが、山本に先立ち、山本に増して海軍の基盤づくりと発展に最も貢献した人物こそ西郷であった。甥の山本英輔（えいすけ）海軍大將は、西郷が海相でなければ傲岸な山本はとつくの昔に首になっていただろうと述べている。西郷は陸軍の大山と共に際立った統率の才に優れた、將に將たる器であった。

<陰の宰相>

西郷が明治海軍に果たした役割は絶大であったが西郷の働きはこれだけではなく更にもっと重要なものが、明治時代の政治全体に関わるものである。明治政府の実体は薩長連合政権であった。時の政治を動かしていたのは薩長であり、薩長の強力な提携と協調があつてこそ明治政府は成り立っていた。どちらが欠けても成り立たぬことは両藩の山県も黒田清隆（第二代首相）、西郷、大山も十二分に承知していて如何に対立しても根本問題、重大懸案においては概ね一致し協力し合った。然してこの薩長を代表する人物こそ伊藤と西郷であった。

西郷は常に伊藤や山県あるいは黒田を表に立て、自分はいつも脇役、裏方、調整役、世話役に徹し薩長の提携と調和を図ることに肝胆を砕いた。政権を争い自ら政府の中心に立たんとする野心は露ほどもなかった。全く私心なく、ただただ国家民族の為に一身を捧げたのである。伊藤が西郷を信頼し敬重したのも西郷のこういう私心のなさにあつた。西郷は二度の首相要請にも「お門違いでしょう」と辞退し、一度も首相にはならなかった。だが西郷は、いわば「陰の宰相」として実質的には伊藤と並ぶ明治政府の中心的指導者であつたのである。

<兄と弟>

従道は天保十四年（1843年）生まれ、通称は信吾で、兄隆盛とは16歳違いである。大山巖の1歳下、伊藤の2歳下である。父を早く亡くした従道にとって兄隆盛は父親代わりであり、大山と兄弟の如く馴れ親しみながら、大山と共に兄であり師父として薫陶をうけ、生涯最も敬愛した唯一の人物であった。二人は西郷隆盛の傍にいつも控え、手足となって働いた。二人は隆盛を仰ぎ見、見

習い、後世あれほどの大人物となったのである。

従道は茶目っ気の多い腕白坊主であり、兄とは性格がかなり異なる。兄の親友で薩摩きっての軍略家であり、明治維新において隆盛を助け大いに活躍した伊地知正治（まさはる）に論語を学んだ。だが従道は覚えが悪く正治は「かんしゃく」をおこして従道の頭をポカリと殴った。従道は『学問では負けるが「けんか」ではおはんに負けん』と猛然と正治に挑みかかった。後年の従道からは円満・円滑を旨とする「穏やか」な人間だと思いがちだが、内には火の如き気性と強い気魄をもった人間だった。気魄に欠ける人物は如何に頭が良く、才があっても英傑とは成り得ない。

従道が19歳の時大山と共に有馬新七に従い、志士の一人として尊王攘夷の先駆けとして寺田屋事件に関与したことを思えば、従道の烈々たる気魄を内に秘めた人物であることが理解できる。物覚えの悪い少年に見えた友人達は「少し従道は馬鹿だと」噂し合ったが、さすがに伊地知正治は従道を見所ありとして「由来英雄、豪傑は大愚者と似かよったものだ。お前達も馬鹿にしていると、この愚者に駆使されるようになるぞ」と誡めた。

注) 寺田屋事件

文久2年(1862) 尊王攘夷派の薩摩藩士有馬新七らが、関白九条尚忠・所司代酒井忠義の殺害を企て京都伏見の宿屋寺田屋に結集したのを、島津久光が家臣を遣わして襲い、殺害した事件。有馬新七は薩摩藩士に殺害され、西郷と大山は投降した。

<兄との永別>

従道の大器たるを誰よりも良く見抜いていたのは兄隆盛である。維新後、陸軍に進んだ従道は明治六年には陸軍大輔(陸軍次官)と進み、当時30歳の従道は明治政府の文武の首脳陣の中でも最年少であり、如何にその才幹が認められていたかが理解できる。その従道の一生の最も悲しい出来事は、西南戦争の兄の死であった。

征韓論争の時、従道は兄を朝鮮にやることに反対した。この日本にとって唯一無二の人物がもし殺されでもしたら大変と、あく迄も兄を思っていたことであった。兄の下野と共に鹿児島に帰る決意だったが、隆盛は強く東京に残るよう申し渡したのである。

城山で兄が亡くなったのを聞き、従道はこの世に生きる望みを失った。嘆きは言葉に尽しがたかったであろう。従道が少しの野心なく、榮譽を求めず、ひたすら国家のため己を捧げたのは、ひとえにそれは兄隆盛を心に仰ぎ続けたことによる。「大西郷」の誠忠無私の生涯を誰よりも身近に知る者として、従道は自分を叱咤激励する兄の魂の声を常に聞いたのであろう。深い見方をすれば、従道の比類のない人格を玉成させたものこそ兄隆盛の死であったのではないだろうか。西郷隆盛という稀世（きせい）の人物を終生仰ぎ見、慕った従道が他の何人とも全く異なる独特の風格を示したのは、思えば何の不思議もない。少しでも兄の心を持って努めようと深く誓い、その恩に報いんとしたのが従道の後半生であったと思われる。従道はこれほどの人物であったが、当時兄弟の双方を知る人々は二人を比べると、いつも「とても比較になり申さん」といった。西郷隆盛がいかにも不世出の人物であり、弟従道が如何に隆盛を敬慕して止まなかったかを思いやられる。

＜将に将たる天性の大將 底知れぬ男＞

大隈重信は従道という人物を次の様に評した。『無邪気にして野心なく、人と争わず、名を当世に求めない従道の姿は万人の目に明らかであり、「将に将たるの器」というのがほとんど全ての人的一致する従道評であった。従道は自ら用いるの才にあらずして、将に将たる天性の大將である』……と。正に従道は帝王型の指導者であった。それぞれ優れた能力を持つ一角の人物の上であり、それらを統御することこそ従道の最も適切な役どころであったろう。

従道は裏方、脇役に徹したが、本来最も似つかわしい仕事は伊藤や山県や大隈の上に立ち、彼等を駕御（がぎょ）する国家の舵取り役であったろう。従道は歴史それほどの人物であったと識者は評している。

大久保死後の数年は政府の中心は伊藤と大隈であったが、大隈は大ボラを吹き、当時花形役者の如くであった。ある日内閣にて従道の前で例の如く大ボラを吹き始めた。すると従道は「ハイ、ハイ貴方は本当に偉い人でごわす。明治何年の何の仕事も、何年の何の仕事もみんな貴方のしたことでごわす」と大久保や木戸らのやったことまで、皆大隈の仕事のように言い出した。慌てた大隈は「いやそれは大久保、それは木戸」とやっきになって否定した。従道はすました顔で「あゝそうですか、私は貴方が余りに偉いから、皆貴方がした仕事かと思うておりました」と言った。以後、大隈は二度と吹くことはなかった。今は亡き偉大な先人達の功績を忘れて、偉い人間は我一人とばかり威張る大隈を戒めたのであ

る。さすがの大隈も従道には頭が上がりなかった。



大隈重信

当時の在野志士の巨頭、頭山満の従道評を最後に掲げる。「俺は大西郷には会えなかったが従道にはよく会い、話もしてよう知っとる。底の分からん男じゃった。…並の男ではなかったことは、あの男がグッと度胸をすえて決心すると万鈞（ばんきん）の重みがあった。彼は大きい事のみ目をつけて細かいことに頓着せん男じゃった。自分が馬鹿になって何も要領を得ぬような面をして、実は大いに要領を得ていたところは、あの男がどこまで大きい人間であったか底が知れん。南洲翁はだいぶん本を読んだということじゃが、従道は書物によって鍛えられたものではなかった。天性、大きく出来ていたもののようにじゃ。とうとうあの人間の深さがわからんじゃった。並々の者があの男の真似をしようものなら、すぐ面の皮をはぎ取られる」従道についての最も深い評価である。

「どこまで大きな人間であったか底が知れん」人物が従道であった。底知れぬ人間などめったに居ないが、従道を除いて当時これに当てはまる唯一の人物こそ頭山であった。如何なる人物をも「一瞥（いちべつ）」して腹わたの底まで見透かすと言われた頭山が「とうとうあの人物の深さがわからんじゃった」と評する程、従道が如何に桁外れの巨人であったかが思いやられる。従道は如何にして自己を磨いたのであろうか？ 天性もあろう。だが決してそれのみでは無い。勝海舟は「従道は年をとるに従いまるで乃兄（だいけい、隆盛）に肖似（しょう

じ、似ている) し来たれり』と言った。前述の通り、従道は兄隆盛の死によって鍛えられたのである。兄の心を抱き続けたことが、かくの如き底知れぬ深さをたたえた人物を生み出したのである。日本の歴史を担ってきたのは表の華々しい舞台に立つ主役の人ばかりではない。西郷従道の如きは殆ど(ほとんど)表に現れることなく、縁の下の力持ちとして国家を支えたのである、我々は歴史を学び従道のように、偉人の心を抱き続けることの大切さを多くの人に伝えたいものだ。

<貧乏徳利 -大隈重信の西郷従道評>

西郷侯は猛将にもあらず、知将にもあらず、謀将にもあらず、天性の大將にして將に將たるの器を有するものなり。……西郷侯の最も尊きところは、無邪氣にして野心なきにあり。彼は人と功を争わず、名を当世に求めず、超然として得失利害の外に立つ。これその器の偉大なる所以にして、実に世間稀に見る人物なり。西郷侯は功名を求めざるとともに、大事に臨んで驚くべき胆勇を現すことあり。明治七年、征台都督(せいたいととく)として長崎を發する時の如きは、いわゆる抜山の氣象五体に溢れて眼中ほとんど政府なき觀ありき。西郷侯は無為無能なれども良く物を容る。あたかも貧乏徳利の如し、貧乏徳利は酒も容るべく、醤油も容るべし。西郷侯は渾然として圭角(とがった角)なく、滑稽にして愛嬌あり、老人も喜び、夫人も喜ぶ。これまた貧乏徳利たる所以にして、外務大臣とならば最も妙なり。ただ彼は自ら用いるの才にあらずして、將に將たるの大將なり。大將は大度にして、よく物をいれざるべからず。故に大將たるの器はすべて貧乏徳利なり。

平成 28 年 3 月 20 日

志雲会塾長 有馬正能